
センター通信 (第51号)

北京日本学研究中心 Tel : 842-4893 (中国側事務室) : 841-5630 (日本側事務室)
1996.4.10 責任編集 : 稲村哲也 吳咏梅

ニュース

- ◆2月26日 : 日本著名な画家平山郁夫先生が当センターを訪問し、「平山文庫」を設立する意思を表明した。
- ◆3月4日午後2:30 : 新教師研修コースの入学式が開催された。北京外大の責任者、センターの教職員、客員研究員および日本側の教授が参加した。入学式では、穆大英副学長、基金北京事務所の小熊所長、国家教育委員会の彭新実処長が研修コースの学生に対して、励ましとお祝いの挨拶をした。
- ◆3月13日午後2:00 : 九期生の卒業式が行われた。竹内主任教授、小熊北京事務所所長が挨拶をした。九期生に対して、中国の教育事業、中日友好の事業及びセンターの将来発展のために努力してもらいたいと大きな希望を托した。九期生の代表もそうした期待に応えるよう最大な努力をしたいと誓った。
- ◆3月17日 : 十期生20名が訪日研修に出発した。彼らは半年の間それぞれの指導教官のもとで、資料を収集し、修士論文を作成するとともに、日本での生活や文化を自分の身をもって体験する。
- ◆3月20日午後 : 客員研究員とその研究協力者(派遣教員)の対面式が二階の師生活動室で行われた。
- ◆4月1日 : 第七代センター日本側主任教授木山英雄先生が北京に到着した。
- ◆4月2日 : 第五次派遣の博士課程留学者4名が、日本へ出発した。
- ◆4月5日 : 竹内実主任教授が任期を終え、日本に帰国した。
- ◆4月8日 : 巖安生主任教授が日本から帰国した。

*** 離任にあたって *** 前主任教授 竹内実

北京日本学研究中心に赴任するにあたって『赴任の手引(業務編)』(1993年7月国際交流基金)をうけとった。私がとくに留意したのは「日本側派遣教授・講師の役割と業務」の章の「日本側の業務は、あくまで中国側の運営への協力である」という字句だった(14頁)。また、そのさきを読みすすめると、「主任教授の役割」という節がたてられ、「センター実施委員会及び工作委員会を通し、中国側と協議を行う」とあって、「工作委員会」というのが念頭に残った(同上)。

しかし、私は一科目は担当するのであるから、学生に講義をしなければならない。センターもけっきょくは学生のためのものである。「面向学生」(ミインシアンシュエション)でいこう、と決心した。いわば、なんにも予定の構想とか抱負があったわけではな

く、学生の求めるところに應ずるほかはないと観念したのだった。

工作委員会についていうと、もっぱらカリキュラム改訂と十周年記念行事が課題だった。いずれも円満に終了したが、この分だけ派遣の先生方には余分の負担をおかけしたことになる。とはいえ、諸先生方のかぎりない熱意と献身によって、いずれも成果をあげることができた。感謝したい。

「面向学生」は、いうは易いが、じっさいはどうだったか。私は立命館大学で文化交流史を担当したので、そのさい配布したプリントを持参し、これによって講義をすすめた。日本と中国と、学生の反応のちがいをたしかめたい考えもあったが、中国にきて、そっくり日本と同様の講義をくりかえすことは難しいとさとした。日本の学生に必要なことは、必ずしも中国の学生に必要なではない。一方で強調したことをもう一方で強調するのが、そぐわないばあいもある。

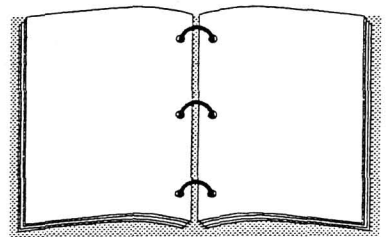
自分だけが教壇で話すのではなく、学生諸君にも発表してもらうようにした。例えば山頭火の俳句の中国語訳である。あわせて、自分の鑑賞も語ってもらい、あとで、レポートとして提出させた。

ご承知のように、山頭火の俳句は平易である。学生諸君の語学力をもってすればいとも簡単に解読できる。しかし、その背景になっている、習慣、日常生活がなかなかつかめないし、中国語におきかえる、その中国語をどのように詩的なものにするか、頭をなやませたようだった。

専攻別の講義とはちがいで、私が担当したのは総合科目なので、学生諸君には、余分な負担だったろう（ただし、文学専攻は必修）。私は、専攻がどうであれ、論文を執筆するさいのヒントをえてもらえばよいというつもりで、話が枝葉末節のところへいっても、あえてひきかえそうとしなかったこともある。修士論文執筆という難関をひかえている学生諸君にとっては、テーマを決めること、その材料をあつめることが、なによりの関心事であって、ヒントはあまり役にたたないようであった。テーマにしても、執筆するのが容易であるか否かも含めてのテーマ選択である。考えてみればムリもない。

テーマを決めても、どのような論文があるのか、論文があるとわかって、それをどのように入手して読むのか、わからない。指導に当たられた先生のご苦心は察してあまりがあった。

私が学生諸君に強調したのは、引用を明記することだった。引用を明記することによって、自分の見解が引用と区別される。引用することは決して恥ではない。何度か、のべたのだった。引用といえば、中間発表のとき、レジュメのある箇所を「日本語になっていない」と指摘したところ、しばらくたって満田郁夫教授（明治学院大学）から「あれは私がいった言葉です」といわれ、顔のあからむおもいがした。学生はそのまま、レジュメにとりこんだのである。私の指摘にたいし「私の言葉ではありません」そ、平然と返答されて、私は内心、怒り心頭に発するという思いがしたのだったが、こうしたドラマは、いま思いかえすと、たのしい思い出である。天下広しいといえども、満田郁夫詩人の日本語に文句をいったのは、私ぐらいなものであろう。



(3.22)

自己紹介

木山英雄（きやま ひでお）センター主任教授、一橋大学社会学部教授、横浜市在住

1934年東京生まれ、育ちも同じ。これまで何回かこちらに来たのは、中国文学という、研究対象を同じくする人々との交渉を主としてのことでしたが、今度は、外国研究という点で同じ立場にある人々に協力するためにやって来ました。どちらの関係にも「同業＝同行」の語を当てることはできるし、対象と立場とでは、普通の状況だと比較も選択も成り立たぬでしょうが、立場はあくまで人に属するだけに、今回の方が、「同」の字により強い実感がこもるのは事実です。まして、昨年10周年を迎えたセンターにとって、人の面での自主独立が切実な問題になってきているとあっては、なおさらです。中国の日本学を背負って立たれる正副主任はもとより学员諸子ともこうした関係をじっくり温めるところからすべてを始めたかと考えています。

池内輝雄（いけうち てるお）筑波大学文芸・言語学系教授、東京都稲城市在住

北京再訪：今から十二年前、春から夏にかけて北京で過ごしました。当時、語言学院に置かれていた日本語研修センターで日本の近代文学を教えるためでした。あの頃と現在の北京はあまりに違うので、なんだか〈浦島太郎〉のような心境です。おそらく、その間、日本もものすごく変化したのでしょう。それは、少し離れてみてはじめて気のつくことかもしれません。でも、人ははたしてどれだけ変わったのか。変わるものか。変わったのは、人が外側にまとう〈衣服〉だけかもしれません。

さて、自己紹介。東京に住み、百キロほど離れた筑波大学に通っております。もうすぐ五十八歳。自分ではもっと若いつもり。専門は、(1)明治末期、日露戦争後に活動を始めた雑誌「白樺」の作家、志賀直哉、有島武郎ら、(2)大正期の新聞・「時事新報」の文芸関係、(3)堀辰雄を中心とした昭和期の前衛文学、(4)戦後の文学一般など、自分でも何为中心なのかわかりません。広く言えば〈文化研究〉です。

家族は妻、三人の子供と雌のワンちゃん（彼女も子供〈娘〉の一人です！）。上の娘はアメリカに留学中。中の息子は猛烈サラリーマン。下の息子はのんびり大学生。

稲村哲也（いなむら てつや）愛知県立大学文学部教授、名古屋市在住

1950年2月5日静岡県生まれ。野外民族博物館リトルワールド（世界民族村のようなもの）研究員をへて現職。大学には最初理系（東京大学理科2類）に入学したのですが、すぐ学園紛争で1年間授業がなくなりました。私は代田先生のように機動隊に石を投げたりしませんでした。その間に理科より「人間」に興味に移り、専攻を文化人類学に変えました。その後メキシコに2年間留学し、博士課程在籍中はペルーで2年余り先住民（インカ文明の末裔）社会の現地調査をしました。対象は標高4,500mの高原でアルパカ（駱駝科の動物）を飼う牧畜民です（最近ようやく「リャマとアルパカ―アンデスの先住民社会と牧畜文化」〈花伝社1995〉をまとめました）。それ以来、牧畜文化研究を専門とし、最近ではネパールやモンゴルでも調査をしています。趣味は現地調査かも知れません。一人で調査に行く前は家内と喧嘩ですが、今年2月にはネパールに家内も連れて行き、シェルパ族（チベット系少数民族）の「春節」の調査をしました（しかしちょうど運良く？葬式に

出会い、そちらの方が主になりました)。赴任後半年が経過し、センターの現状、学生の能力(有能さ)や関心、中国での生活事情などが大分わかってきたので、今後センターと学生さんのために非力を尽くしたいと思っています。2才の娘を山口さんのご令嬢と一緒に幼稚園に入れることができたので(娘たちには試練の毎日ですが)、家内と共に、私も留学生の中国語コースを午前中受け始めましたが、学生生活ってけっこう辛いですね!(学生時代に楽しかったのは勉強しなかったせいですかねえ)

小川栄一(おがわ えいいち) 福井大学教育学部助教授、福井県鯖江市在住

北京日本学研究中心の先生、職員、学生のみなさん、ニーメンハオ!日本語学の小川栄一です。福井大学から参りました。日中文化研究を推進し、日中友好交流をリードする当センターに初めて参加することができて光栄に思います。宜しくお願い致します。

中国に来たのはこれで4度目ですが、来るたびごとに、日本と中国との距離が縮まる思いをします。最初の来訪は1988年ですが、総じて不便な生活でした。マッチが品薄で、西安の町中を歩き回ったことがあります。それが今は日用品のみならず、米国製パソコン、日本製オーディオ、イタリア製の背広や靴など、あらゆる高級品、輸入品が店にあふれ、衛生放送でNHKニュースが入るなど、外国にいる不便さをほとんど感じません。また、かつての店員は無愛想な人が多く、買物の度に腹を立てていましたが、それも相当改善されました。

かつての留学生は日本の経済発展に驚いたものです。しかし、このように経済的に違いが小さくなると、留学生の視点も、長い時間をかけて形成されたもの、たとえば文化、社会、言語、文学、生活習慣などの違いに向かうと思われれます。日中の本当の違いが見えてくるでしょう。ですから、当センターの今の学生たちが訪日して日本をどのように観察するのか、どのような日本研究をするのかとても楽しみです。清新な視点による研究を、私も微力ながらお手伝いするつもりです。

河合正朝(かわい まさと) 慶應義塾大学文学部教授、東京都台東区在住

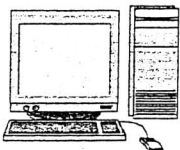
1941年11月6日の生れ。現住所が本籍地でもある東京の下町育ち。その割にいわゆる気っふや歯切れは決してよくないと自分では思っている。1964年3月慶應義塾大学文学部卒業、1971年3月大学院文学研究科博士課程単位取得退学。1969年4月慶應義塾大学文学部助手。専任講師、助教授を経て1988年より教授。専門は、日本美術史学。なかでも日本の中世から近世、言い換えるならば、室町時代から桃山時代にかけての絵画史を、いまは水墨画の問題を中心に考えている。従って、日本と中国の文化交流や比較文化には関心がある。美術を制作の面から捉えるのではなく、それを観賞する立場、制作を注文する立場からも考えてみたい。今回の北京派遣の機会に故宮博物院の収蔵品や古都西安での古跡見学などを通して、日中の文化、美術交流の跡を実際に自分の目で確かめたい思っている。趣味として特にこれといったものは無いが、仕事に重なるけれども美術鑑賞、また、お酒を飲みながら人の話を聞くというのは好きなことのうちにはいる。編著書として、「日本美術絵画全集・友松、等顔」(集英社1978)「禅林画賛」(毎日新聞社1987)、「日本水墨名品図譜3雪舟から友松」(毎日新聞社1993)、「水墨画の巨匠4海北友松」(講談社1994)等がある。

草薙裕（くさなぎ ゆたか）筑波大学文芸・言語学系教授、つくば市在住

草薙裕です。どうぞよろしく。ホテルへのチェックインのとき「薙」という字がワープロにないので、別の漢字にしてほしいといわれました。中国では「薙」の字は「剃」で”代用”するようですが、日本語では大違い。お坊さんは頭を剃りますが、頭を薙いたら命がありません。日本学研究中心では草を剃らないで薙いでください。ところで、本職は筑波大学文芸・言語学系教授。つくば市（大学は漢字で市の方は平仮名です。中国語では困りますね）、いわゆる研究学園都市に住んでいます。

1936年4月28日生まれ。したがって、今年、北京で還暦（花甲）を迎えます。生まれたところは台北。小さい時は中国の環境で育ちましたから、今度始めて、北京へ来ましたが、あまり違和感はありませんでした。

大学を出てから数年、英字新聞の記者をした後、アメリカのジョージタウン大学で言語学の博士号を取り、同大学の講師、ハワイ大学の助教授、準教授を歴任した後、20年前に筑波大学に移りました。専門はコンピュータ言語学。どんな学問かは長くなるので改めて書きます。



篠崎摂子（しのざき せつこ）国際交流基金日本語国際センター、東京都文京区在住

国際交流基金日本語国際センターからまいりました篠崎摂子です。日本語教師研修コースの「日本語教授法」と「聴解・音声会話指導の基礎訓練」を担当いたします。北京に本学センターに派遣されるのは、去年に続いて二度目です。主任代行の徐先生をはじめ、中国側のスタッフの皆さんや、長期派遣の先生方とはもうお馴染みですが、6月末までどうぞよろしく願いいたします。

昨年書きましたが、北京は学生時代に2年間留学しておりましたので、またここで生活できるのが嬉しくてたまりません。来るたびに便利になっていた、社会主義市場経済と改革開放政策の成果？を実感しています。

派遣専門家の中では一応紅一点、最年少なので、気軽に話しかけていただけたらと思います。また、北京やその他の地域の最新情報をお教えいただけるとありがたいです。請多指教。謝々。

代田智明（しろた ともはる）東京大学教養学部助教授、東京都世田谷区在住

1951年生まれ。とっくに不惑の年を過ぎているのですが、惑ってばかりいるせいか、どうも年相応には見られません。先日も、中国語家庭教師の胡老師に35歳に見えるとか言われました。若く見られるのは通常喜ばしいことのようにですが、この年になって来ると、貫禄がなくて軽く見られるとか、若いくせにと言われるとか、何だか案外デメリットが多いような気がします。東京生まれの東京育ちですが、中途半端な山の手だったので地方性に乏しく、言葉をはじめ他人の感化を簡単に受けてしまいます。60年代末の学生運動にはすこし遅れた時代なのですが、人の尻馬に乗って、高校生のくせに機動隊に石なぞ投げていました。大学で中国文学を専攻して卒業しても、ろくに就職のあてもない時代で、研究者になるなどという自覚もなく、何となく大学院へ進んだのですが、いわゆるモラトリアムのはしりだったのかも知れません。同じ大学院で学んでいた一つ年上の女性と、また人並みのロマンスがあって在学中に結婚。かみさんは企業に勤めることになって4年ほど髪結

いの亭主をさせてもらいました。従って未だに頭が上がりません。茨城大学に5年、東京女子大学に6年努めた後、東京大学の駒場に移って3年たちました。専門は1920年代から40年代の近代中国文学ですが、一応、同時代の動向にも関心はあります。いま取り掛かっているのは、魯迅を主に、小説や散文をフォルマリズム風に分析しながら、作家の思想や歴史的背景と結び付ける作業です。性格はごく単純で、ご覧のとおりですが、少々おっちょこちょいで、たまに間が抜けたことをしてかすこともありますので、宜しくご指導ください。

高見勝利（たかみ かつとし）北海道大学法学部教授、札幌市在住

1945年4月17日、兵庫県生まれ。東京大学大学院修了後、小樽商科大学、筑波大学、九州大学を経て、現職。専門は憲法学。趣味はスキーと散策。主要業績・『憲法ⅠⅡ』（共著・有斐閣）、『皇族典範』、『皇室経済法』（共編著・信山社）、『憲法学50年』（共編著・日本評論社）。前は1988年9月から翌89年1月にかけてセンターの講義と演習を担当しました。今回は、2回目でもあるので、8年前と比べて、少しは余裕をもって授業に臨めるものと考えております。日本の法制と政治に関して、重要と思われる問題に限って、出来るだけ平易に解説するつもりです。とはいっても、日本で十分準備するだけの余裕はなかったもので、これから、講義を進めながら自転車操業で準備を行ってゆくことにします。どうかよろしく願います。



竹村信治（たけむら しんじ）広島大学教育学部助教授、東広島市在住

<転機をもとめて> 海外に出るのは二度目。一昨年、韓国・中央大学で「日本説話文学研究の方法と現在」と題して話す機会があり、それ以来のこと。これまで中国語とは縁がなく、無謀といえどもまったくその通りなのですが、韓国での日本文学研究者との楽しい語らいが忘れられず、引き受けてしまいました。

生まれは1955年3月21日。本年めでたく？厄年。出生地は兵庫県和田山町（山陰線）。小学生の頃は銀山で知られる生野町、中学・高校は姫路市、大学・大学院は広島市。最初の赴任は金沢美術工芸大学で、次に福岡女子大学文学部、四年前、広島大学教育学部に移りました（担当は国語科内容学<国文学領域>といういかがわしい分野）。ほぼ5～8年ごとに居所を転じている勤定になり、今回も5年目の転居。我ながら慌ただしい人生と思わないでもありませんが、この度は研究上の転機を求めていること。中国の学生との対話を通して自分の仕事を捉え返してみたいと思っています（近年の著述は『日本文学』95年7月号、『国文学』95年10月号所載のもの）。

ともあれ、あれこれ不安な毎日。転機ならぬ脳天気よろしく、皆さんにも奇妙なお尋ねをするのであろうと、これも不安の種の一つです。どうぞ種々無礼の段、ご海容の上、よろしくご交誼のほどお願い致します。

正岡寛司（まさおか かんじ）早稲田大学文学部教授、東京都新宿区在住

専門領域は社会学。1935年7月20日、広島市内で生まれる。18歳の時広島から上京し、早稲田大学に入学、それ以後40数年間、早稲田大学の構内で生活しています。

中国着任の抱負：今回の訪中では、自分の研究よりも教育に専念するつもりです。ただし、数年前に試みた「日中比較家族の共同研究」が現在中断状態にあるので、これの再会を目指して中国側研究者との接触を密にしたいと考えている。この点で、とくに中国側の若手研究者の積極的な参加の可能性を探り出していきたい。

研究テーマのキャリア(1)青年期：主としてドイツの社会学者マックス・ウェーバーの影響のもとに「宗教と経済の関連」について勉強する。この研究過程で共同体、親族・家族、そして社会規範に関心をもつようになる。(2)中年前期：地域社会と家族・親族の実証的研究を実施した。農漁村、炭坑町、工業都市、地方都市や大都市をフィールドとする。(3)中年中期：江戸時代庶民の生活と人生に関心を抱き、宗門人別帳や地方文書の収集分析に着手する。一方で、アジア諸社会との文化・社会比較に着手し、フィリピンの農漁村で参与観察を行った。(4)中年後期：歴史社会学に関心をもち、当時成立しつつあったライフコース論に興味を引かれ、これまでやってきたことをこの視点のうちに統合しようと試みる。アメリカの大学で一年間講義をしたことと、日米研究者で共同研究を実施したことが、自分のその後の研究を大いに進展させた。(5)向老期(現在)：人びとの人生や家族生活あるいは職業生活が歴史的・社会的状況の影響を受けてどのように変化し、またそうした社会的実体の変化が全体社会をいかに変えていく潜在力と運動力とになりうるかを理論的かつ実証的に研究することに日夜努力しているつもり。

現在進行中の研究：(1)江戸時代農民のライフコースのイベントヒストリイ分析、(2)戦後日本人のライフコースの連続性と変化のコーホート研究、(3)現代青年のライフコース研究(パネル研究)、(4)ヨーロッパの産業化と相続制度の関連(文献研究)、(5)日本現代家族の趨勢的変動(全国確率標本による全国家族調査)

宮村治雄(みやむら はるお) 東京都立大学法学部教授、神奈川県相模原市在住

中江兆民を中心とする近代日本の政治思想の諸問題を主たる研究テーマとしながら、東京都立大学法学部で日本政治思想史を担当して、もう二十年あまりになりました。5年前からは、アメリカン・フットボール部の部長も務めています。女房殿は、頭を動かすのが面倒になったので体を動かしたくなかったのじゃないかと、いっていますが、本人は、それにはまだ反論の余地があるように思っています。

兆民先生はとうとうこられなかったようですが、息子の丑吉は北京に住み着きました。丑吉には及びもつきませんが、私は、この間一度は訪れてみたいと思い続けてきた中国に来られて、また四十代の最後の年を中国で過ごすことが出来て、今は素直に喜んでいます。滞在中は、体も、そしてできれば頭の方も、出来るだけ動かしてみたいと思っています。お引き回しのほど、よろしく願いいたします。

山口敏幸(やまぐち としゆき) 国際交流基金日本語課

1953年、福岡の片田舎に生まれる。一昨年夏に家族と共に赴任。日本語教師研修コースを担当している。中国とは縁が深く、最初の訪中は1976年の12月。1976年と言えば、偉大的毛沢東主席、敬愛的周総理そして朱徳元帥の三巨頭が相継いで亡くなり、唐山で大地震が起り、四人組が打倒された、ご存じあの中国激動の年である。それ以来、中国とはずっと関わり続けている。中国で日本語を教えるのも今回で4回目となった。家族は妻が

一人に、子供が二人。上の子は4月から日本人小学校に入る。下の子はこの3月から外大の付属幼稚園に通い始めたが、慣れずに毎日泣きながら通っている。以前より目ははれぼったく、声もかすれたようだ。

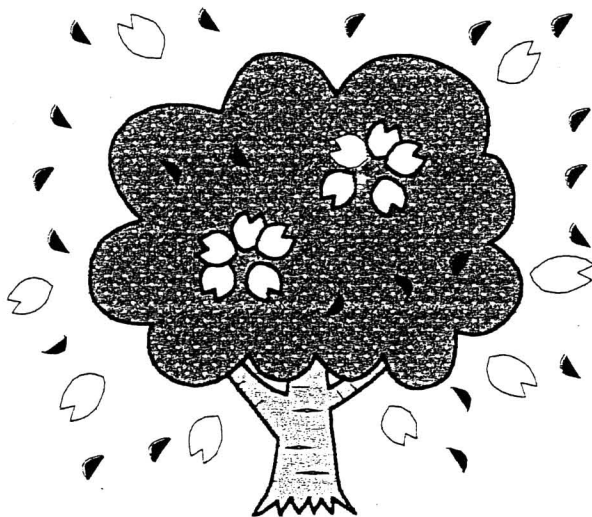
山野正彦（やまの まさひこ）大阪市立大学教授、大阪府三島郡島本町在住

1945年11月、大阪市生まれ。1975年3月、大阪市立大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程単位修得退学。人文地理学（地理思想史、文化地理学）専攻。これまでにスリランカ、南インド、北部タイ、ジャワ、中国・雲南省などで村落調査あるいは調査旅行を行う。最近では景観論の研究（人間と景観との関わりとの研究）に集中。1992年8月から93年7月まで北京日本学術センターの客員教員。趣味：旅に出て野外の世界を見たり経験したりすること、北京では風水師の使った各種の羅針盤を集めている。着任にあたっての抱負：わかりやすく説明することに努めたい。異文化間の相互理解のためには、知識や情報の交換の重要性もさることながら、個々の具体的な場面におけるコミュニケーションの経験そのものを通じて自己の相対化をはかることが大切であると感じている。

編集後記

桃花や迎春花（レンギョウ）が鮮やかな季節になりました。先学期のおわりには、寒さが厳しくなるとともに先生方も次々と帰国され、長期赴任者としては淋しいものがありました。春の訪れとともにセンターに活気がみなぎってきた感じです。とくに今学期は再派遣や中国滞在歴が豊富で中国びいきの先生方が多いため、北京生活をエンジョイする雰囲気のがつけから強く楽しい限りです。厳安生先生も日本から帰国され、万全の態勢がととのいました。

今号は今学期最初のセンター通信なので、派遣教員の自己紹介特集となりました。美人事務主任畦上さんの紹介が今号には間に合いませんでしたが、次号まで楽しみにお待ち下さい。次号では引き続き、中国側教員、客員研究員、研修生、学生などの自己紹介を掲載したいと思います。また、学生にも編集に加わってもらうことになりましたので、学生の寄稿もできるだけ掲載し、先生方へのインタビューなどの企画も考えています。もちろん、先生方の専門に関することや随筆なども、どしどしご寄稿下さい。また、中国での小調査・研究を掲載する「研究ノート」欄も是非継続したいと思いますので、ご協力お願いいたします。



前主任教授の竹内先生が4月5日にご帰国になりました。先生の温厚な人柄に中日双方の教職員全員が敬服しておりました。個人的には、コートや羽織り毛皮の帽子をかぶって枯葉が舞う友誼賓館の道を歩く先生のうしろ姿が特に好きでした。最後に「離任にあたって」のご寄稿で、ご自身の教育経験に基づいた貴重なご示唆をいただきました。先生は最後の工作会議や全体会議で「センターの将来像についての検討」を強調されました。わたしたちも先生のご意志を引き継ぎ力を尽くしていきたいと思っております。